



護國女太平記

一

例3
49
1



護國女太平記
乾

伊¹³
49
1

護國女太平記序



録山貴妃ヲ玄宗ニ進メ比企判官縁女ヲ
實朝ニ奉ル和漢其怪甚シキヲ算ルニ
遑アラス皇天五ノ數ヲ示シ開乱ニ及ニト
ス運強ニ至ル毒雲ヲ見ル深秘重隠ノ
實書大平ノ賜リナラント袖懷ニ置ノ
序トス

不
49
1

享保二丁酉八月上旬

東溝散人蜜書

護國女太平記惣目録

一 峯之弟師寅童子二醉之事

第一卷 附是源寺由來之事

第二卷

一 左馬頭殿乱酒御短氣之事

附根津守右衛門守討之事

一 酒井雅樂頭拔意成振之事

附左馬頭殿御生害之事

第三卷

一 智積院之随高坊御目見之事

附柳澤弥太郎牧野止立入之事

一 柳澤弥太郎初御加増之事

附女房ヨリ花籠就之事

第四卷

一 於了免於御前之將哥之事

附牧野柳沢相談之事

一 將軍家綱公御病氣之事

附雅生氏偽言被病之事

一 堀田備中守秀言之事

附雅生氏切腹之事

一 雄村公清御後軍出也之事

附護持院僧正清祈願之事

一 酒井稻葉當根權太史小及入之事

附新發新太史惠達之事

第五卷

卷ノ六第

一 德松君湯逝去之事

附酒井次右馬將軍之云々

一 諸大名往無事 上質之事

附牧野本庄屋鋪中而成之事

一 山羽守 湯屋中無事之事

附柳沢六右衛門之云々

卷ノ七第

一 湯島小聖堂以建之事

附敷生林制所而云々

一 順安金銀山領之事

附牧野湯役所免之事

一 柳澤初之頃城改修之事

附東の花 止質之事

卷ノ八第

一 柳澤孫孫之事 湯加増之事

附法住僧烟屋之事

一 蘇科俊之事 柳沢小親之事

附柳沢大老鐵小親之事

卷ノ九第

一 柳澤再更女嫁之事

附所賣大書平藏之事

一 義次郎之事 湯屋中無事之事

附柳沢平藏之事

第十卷

一柳澤は松平の名字給ふ事
 附井伊平多評儀之事
 一黄門光國御紋多を清の御事
 附夷儀守虚言之事

第十一卷

一夷儀守は百万石の御事給ふ事
 附後援院僧の調伏儀之事
 一初次大坂の藏屋敷を建てる事
 附渡唐の利重を中興之事

第十二卷

一太公保大隅守白雲の御事
 附少池屋雲の御事

第十三卷

一夷儀守は松平の御事
 附江戸表の御事

一北に九新御殿之事
 附お倉の御事
 一岡部越前守の御事
 附加増の御事
 一甲斐守の御事
 附市川新助の御事

第十四卷

一井伊持親の御事
 附吉保連判の御事

卷一 諸大名軍多配之事

附根城を粮用意とす

第一 賢女釵を用て護國之事

十五 附治天名夜中光城とす

卷一 柳澤百石と市来中政と事

附甲斐守を督とす

以て

護國女大年記卷之一

峯の某所宣童子二所の事

附尾源寺由来の事

抑三列之住徳川三河守廣忠公未詳世嗣と云子と云其方深難知也
同國風集寺峯と某所小初願城と給ひ以書信を渡りて念ふ
然ふを復懷妊とて天文十一年十二月十六日市来男子出生一信ふ
市来婦市来女と云ふ市来名氏也其子と云稱ふ能ふ不思家
某所如來の上將神の内宣童子と云今昆羅大明神の化身と云
君市来と云の目より宣童子一神と云ふ其所の寺僧大慈と云
また乃ち不知信之某所が佛所と云はる新小宣童子と云
十二童子と云はる小竹と云はる市来成長と云て又智知りの愛と云
市来年中と云市来君と云放給ひ今川義元の子と云二列の山領知と云

中より天下泰平國土豊より魚も理成明白述るるに
元康公山部族より人を信の考を信仰せし我天運来りては是より
云多武振りたる日の下は人の棟梁成下は今日陽師の礼に是を
建立とすしと定むる側は其言を信りて我も日多武考武士と自ら天下
を以て若し海は其の一人を信の考を信仰せしと俱に悦ひしる
果して是武運来りて我の考を信仰せしと俱に悦ひしる
師真田左馬尉幸村より我を平に我國に下す我々の夜討
八尾の焼討唐傷の急戦山川の石火矢火田の伏撃を我々後又
由村長門守長吉我々の急戦山川の石火矢火田の伏撃を我々後又
而く多武方化の考を信仰せしと俱に悦ひしる
なして是討んとしと定むる側は其言を信りて我も日多武考武士と自ら天下
を以て若し海は其の一人を信の考を信仰せしと俱に悦ひしる

及とも庵之祖元祖の教を信仰せしと俱に悦ひしる
ひ及右の考を信仰せしと俱に悦ひしる
倫言は其の如しと定むる側は其言を信りて我も日多武考武士と自ら天下
を以て若し海は其の一人を信の考を信仰せしと俱に悦ひしる
元康二年四月十七日 我康公山部族より人を信の考を信仰せしと俱に悦ひしる
合して是源寺より我の考を信仰せしと俱に悦ひしる
童子は元康公山部族より人を信の考を信仰せしと俱に悦ひしる
童子は元康公山部族より人を信の考を信仰せしと俱に悦ひしる
天の降る雲は其の如しと定むる側は其言を信りて我も日多武考武士と自ら天下
を以て若し海は其の一人を信の考を信仰せしと俱に悦ひしる

家徳公六事和慮弱と流下也結友万事大光酒井雅忠公云々
中平式仍ハ老中若手参勤女中居下と云々同通成也云々
只此一書一の信平成友と云々事蹟なく世界をておとせられ
和なる依り重平所改通皆大光の雅忠公成り感徳ありつゝ
諸大各所へ從小忠領ハ内守と云々女子人々方雲和泉守
より久松平信成守頼常水野忠濃守中川因幡守松平豊永守の云々
と依り親族多く我信成振舞ひ云々防連枝成り云々神々
と余の流信成人云々の信平云々ハ雅忠公ハ任長公云々
邪氣深し既ハ信達公驍勃し和ハ信達公教訓平田甲斐公一味
對立し和具負の仕方有しと云々大光の威徳あり云々
此我信成公成り云々事蹟なく
護國女太平記一終

護國女太平記卷ノ貳

左馬頭乱酒短き事

附根津守右馬頭と討て

然小市連枝館林宰相左馬頭信成公ハ平常ハ仁義の道成重し儒者
林大寺院成り云々學文云々也信成公移りて吏方留甲府宰相左馬頭
細重公ハ大酒色歌ハ乱酒短き事と云々近江成り討て信成公ハ
成り及の事信成公云々事蹟なく信成公ハ忠義公ハ
信成公ハ一書ハ細重公の事持成公ハ諫言教成り及の事信成公ハ
信成公ハ酒宴多し友信成公云々の事信成公ハ見たりと云々諫言不
中ハ信成公の道成信成公云々の事信成公ハ見たりと云々信成公ハ
信成公ハ信成公ハ討て信成公ハ死して信成公ハ附成公ハ信成公ハ
信成公ハ思成公ハ同成り信成公の事信成公ハ酒宴多し信成公ハ

原とては信實なる罪人ヲ改めしむるに科人等ハ教政道
 不足と成威ハ是公儀の誤天追及成爲信々の歎ても案とて
 と云ふことの四軍及ふこととありて衆もなき忠の全信然
 自ら打捨信い更さずして忠臣の死體成爲其身の席として是を
 背より抱ひ置きのかゝりたる人ある若くは遠近常や一村に於
 妻子懇親俱々令とし席には主役即ち忠臣成爲信々の要家
 高の山に臨み民は席を知り酒呑童子の如きどん忍違ふ事
 未嘗に呪ふに我れ智信の道而公の神國をも尊ぶ例なり
 若くは大自中ふ底信い歎みの山に臨み天は信をそへる竹
 意程も君するもの世座なりと云ふ言との云ふ或は毎座とて
 永く大酒の山に相見え思ふ信の山に臨み信の山に信ひなほ
 今と打捨信い老を泉よりたけしめての武運長人の市守成人

の事あり。うち馬の言とて。市檄歸は宵自今。信用なきに於ては
 存命は誠を成すも見んより。汚手截り死んより。全知之。吾意の
 市意を成すも知と。一夜の怒り。一夜の歎て。自を毒と。頭も耳人。被
 濡。一より。総重と。此れ。必礼と。あやと。村の身のと。成見あり。と
 活て。信の。却て。不礼と。あやと。ん。と。鬼畜。歎。の。の。と。言。免。レ。ス
 と。討。と。する。奴。成。ま。た。と。信。を。ま。は。免。ん。に。立。と。と。白。服。せ。給。ふ。事。を
 為。く。是。信。を。ま。は。免。ん。に。立。と。と。白。服。せ。給。ふ。事。を
 改。と。せ。信。を。ま。は。免。ん。に。立。と。と。白。服。せ。給。ふ。事。を
 ある。と。と。と。此。知。意。の。うち。馬。あり。と。と。と。白。服。せ。給。ふ。事。を
 市。意。を。成。す。も。知。と。と。と。白。服。せ。給。ふ。事。を
 総。重。と。す。分。の。四。り。等。あり。と。と。と。白。服。せ。給。ふ。事。を
 猫。の。打。落。と。と。と。白。服。せ。給。ふ。事。を

黄泉の收佛果より勝るものと云ふ事成死て收お神りく」と云々
初て此書給ひしれども何ふ事有るやと云ふを底意宛都と云ふ所係
練事内は者の大造之聖賢と雖も云々云々 和漢其例を尋ね
ぬる忠臣よりて今以て心改め神酒よりと云々云々 忠臣の忠
款忠貞又達しるも痛しと云々神の守護と成て平伏して云々云々
是が綱重云云酒は田給ひる孫より加急と終り田守道は親の
忠貞今又忠誠と思はれし作後一は尚 市仁の程成収い而も
絶しる事有る一の忠臣あり孫より其友とて云々云々 獨り
友社の神として云々一は馬也の市守補におりて新ふ社成造したる
根津の社と云々 若若虎春若の四座神と云々信あり世の人知也
酒井雅樂頭我言致極ふ事
附在馬頭殿市守書云々

叔父四代目の武將 家綱公市世嗣あり信之市養若之田代太田
年儀不変如き時代の酒井雅樂頭忠清忠孝肝優の人を云々云々
忠義も貴く忠貞とて大老も敬し形多し其程の勢あり大い名
首となりたる事ある社神あり是も一將軍家先雅樂頭を被り甲斐
館林より四代目兄より一親を市養若とせんと云々後有る事
雅樂頭忠孝を市養若と云々云々 忠孝の市弟甲府公將軍家の市連枝
供合に礼酒放持する事あり云々 忠孝の市弟甲府公將軍家の市連枝
給ひしる事あり云々 忠孝の市弟甲府公將軍家の市連枝
云々云々 忠孝の市弟甲府公將軍家の市連枝
忠臣の大名に退き儒肝いあり信之市養若より云々云々 改事成り云々
市弟雅樂頭市先代市家風如き儒佛の學文と云々云々 市弟
武學の事あり云々 忠孝の市弟甲府公將軍家の市連枝

吾子一時節霜月中あるを大方に雪霜枯木の歌をんを賦
 吾子之十九の海言中して思移す六四の合中女中見之哀
 女中して吾子と縁を以て事とすとの言を以て事とす
 中合の事也

護國女太平記之終

其四

納於御前詩哥之事

附牧野柳澤古德之變

去、難林綿音、柳沢氏より才女を以て和歌を信じてゐる。其天性
學文と好む所も友婦人性といふやうに嬌情は御意所の四趣に入信の
稀として此世仕の女中程の常であく御母雲桂昌院梅にも急るが義成
親思ひより前通る女房細うちと云ふは後述の如き御叔父の侍を懐か

要之

市川高利紙硯箱式と納款式は皆主として内面神と所賢
 より言願の聖像として贈りたるを以て案に於て彩色嬌の
 鑑を以てせられたる一丸を用きたるも是より其神の意が如く思はるる
 特達者なりと云ふことと認むる則ち所賢の所より

雪中吟

北日雪漫々庭前攻壯觀銀花銀樹下白虎玉龍蟠

枯木の春

白州や来ぬを雪花と見て狂歌作く蝶と飛来る

斯仕事は小賢人のと妬て驚き悲し物。女に嫁ぬの志深き節に
勝る。益明方ののえ懐成致たりと見えたりといふ言敬の言中局
中よりある女中にて、又あつ仕込の武藝學交かゝる元居の種みゆ何
れや我らにも縁生ゆをいふ妻に能く裁きてはと申す方ねは桂昌院梅

田親王連約束の如執成頼多る牧野とて言ふ及將軍に先言言後
 を以て信仰せしむ所目見の二僧に官成軍一橋と武運長久の二新橋の爲
 所城の鬼門祐田稻一橋の外に地画と清一寺の新橋前と建護持の
 文字とに護持院大僧正と改寺領子なる清建三寺に格外におせんと
 諸人誓願するお願もは能方人にと信じて事業成り果すとて橋くは
 斗暗成虫候しとねた女房の縁にと知る人更におかりとあや

酒井稻葉曾根權多小及入内事

附新及新十帝惡逆之序

秋小酒井河内守忠孝、文雅出、不首尾、依る衆智の器、たゞしく、目録を
 送る、又、遠に、秋、今、智、終、明、次、中、有、次、が、意、を、思、案、し、當時の、五、後、
 見、る、は、柳、沢、が、相、も、か、ち、平、一、と、彼、中、の、心、心、と、見、た、れ、は、何、卒、は、な、
 節、少、く、塵、埃、極、ん、と、思、有、柳、沢、の、意、を、く、ち、の、ち、如、毎、日、志、城、成、に、當、る、と

[illegible]

田村の西へお宿る殿さまの言はれ給へる松と服能と田村松風と
番衆の出入る言書目道成もまた西尾源成も親世と云ふも
大名一番の名人と云ふ言の居難き所なりと云ふ言はれ給へる
限り一時并伴揚助氏市市と進歩なりと云ふ言はれ給へる
所政道車とて万民泰平と云ふ言はれ給へる言はれ給へる
因信ひあふ市市と云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ
ゆゑに国母君を定む所なりと云ふ言はれ給へる言はれ
なる言文の中へ忠告なりと云ふ言はれ給へる言はれ
見ゆ所なりと云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ
被養ひて給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
上意と云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる
難き思ひ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
將軍忠告なりと云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ

城の法儀と時辰と云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ
柳沢柳沢と云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ
揚助氏の言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
以てと云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
廿一夜と云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
四張と云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
お宿る言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
馬島の言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
中へと云ふ言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
見給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ
ヶ所の言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ給へる言はれ

後宮の美女を事ふ如くなり。お願ひの心にて、此の如くして、安んずる。此の如くして、
尋ねて、友七八人、撰り、年々、此の如くして、安んずる。此の如くして、
折を、見、各、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
御目、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
初と、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
御目、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
信ひ、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
向、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
世、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
事、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
此、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
名、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、

此、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
子、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
驚、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
半、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
去、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
成、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
所、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
修、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
中、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
後、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
別、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、
此、此の如くして、安んずる。此の如くして、安んずる。此の如くして、

牧神中、名柳氏、白狐、之、種、牧、先、道、々、時、常、能、し、四、月、の、月、に、所、使、乳、
有、是、の、種、社、所、胞、平、愈、と、中、の、獲、持、院、の、山、形、種、友、之、に、所、感、得、
之、種、之、牧、之、種、猶、し、天、上、泰、平、の、山、形、種、之、勿、痛、後、存、之、種、之、
言、と、ま、す、と、は、何、月、女、中、方、の、生、佛、の、種、思、ふ、の、も、も、獲、持、院、と、
所、城、女、中、の、の、多、結、元、分、獲、持、院、の、柳、氏、と、合、神、成、り、女、中、と、所、所、
女、中、と、云、柳、之、を、答、意、し、ま、す、と、目、雲、坊、月、雲、坊、と、云、る、又、僧、又、抱、童、男、
孫、女、其、女、中、の、酒、の、お、と、お、り、と、友、一、入、評、判、能、能、成、之、種、天、上、の、種、僧、と、
如、し、は、皆、柳、氏、の、所、所、が、出、せる、種、也、

洞雲金鉢鎮小成之事

附牧野依監守以收清免之事

斯而而腦平念の四款と云く此條は仁丹井伊揚歌平の如仕也云く退勤の
節は牧野伯尾が成りて事々々上極早達の時故也成りて是より事々々

言成也。是も將軍に相する事、せ給ふ氣を成し、山勢氣を散んと進
 ず。此を真りのかきまゝ、金多の女中とし、はは仕り、所病氣の根を成し
 たり。辛骨なる之を及指し、四條のつゝ、心とを附系と、肉言成なり。これ
 り、佐渡書しむと思ふも、若量なり。人あり、市機場を、若きと申、此種に
 不及、小姓須賀金杯、禊の新とて、いふと、言ふ、此若年忠義、深く佐渡を
 以て、撒るの跡たる、流石井侍、揚部、乃て、成元、東佐渡、も、あま、かゝり、今、此性
 候と、勤天、乃て、家来と、成り、の若き、須賀山、なり。牧村、佐々、練言、と
 佐渡書、形と、信し、と、後、いふ、牧村、言ふ、云々、いふ、井侍、反の、因言、来、いふ、是
 初、相書と、お後、の上、巻、も、角、も、生、下、と、高、度、道、の、い、と、言、目、数、と、經、基、た、所、は、
 なく、金、杯、い、く、若、柳、派、び、由、成、中、は、是、い、お、相、書、て、相、く、を、元、い、お、相、の、志、係、我、
 始、り、房、成、と、い、酒、妻、の、お、る、成、い、何、年、と、て、若、君、市、延、生、成、五、相、と、思、ふ、の、
 り、お、此、今、是、と、殊、元、の、臨、幸、と、あり、せ、給、と、却、り、天、乃て、高、なり、い、は、を、反、し、

護國女太平記卷之七終

（Faint, illegible text, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text appears to be in vertical columns, typical of traditional Chinese manuscript format. There are approximately 15-20 lines of text visible, though they are too faded to transcribe accurately.)

